29. 肺癌の早期発見におよぼす集検の意味

井川道春，花岡和明，遠山富也
（井上病院）

近年の肺癌による死亡率の上昇に伴って，肺癌の検診システムの確立は，重要な課題となってきている。一方，一般に認められている胸部写真および喀痰細胞診の組み合せは，その経済効率から疑問視するむきもある。われわれは，当院における企業健診のデータから，その妥当性について検討した。1991年度，当院での企業健診は12,135例であり，そのうち1例が，小細胞癌と診断された。また，当院監督下の千葉銀行過去6年間での38,605例では，4例の肺癌が発見されている。その頻度の低さから，企業検診での喀痰細胞診の導入には疑問があり，従来の年1回の胸部 XP による検診が，妥当な線と考えられる。

30. 気胸を契機に発見された肺抗酸菌症症例の検討

森　典子，新島結花，鈴木公典
山岸文雄，佐藤展将，庵原昭一
（国療千葉東・呼吸器科）

気胸を契機に発見された肺抗酸菌症症例7例（肺結核6例，肺非定型抗酸菌症1例）について臨床的に検討した。中高年の男性が多く，重症の呼吸不全例・死亡例はなかった。気胸発症は右側に多かった。delay は気胸を合併しない肺結核患者より短く，初発症状が気胸症状の場合はとくに patient's delay が短かった。

31. 嫌気性菌肺炎（壊死性肺炎の疑われた）と肺結核の合併した1例

猪狩英俊，菊池典雄
（千葉市立海浜・内科）
新島結花，山岸文雄
（千葉東・呼吸器科）

55歳，男性。主訴は発熱，胸痛，咳嗽，喀痰。胸部X線上，右側に多発空洞を伴う広範浸潤影，右側に淡い浸潤影あり，壊死性肺炎と肺結核が疑われた。TTA にて嫌気性菌5株，喀痰培養にて結核菌を検出。抗菌剤，抗結核剤の併用にて改善がみられた。

32. 極めて稀な M. kansasii による肺外感染症を経験した

溝尾　朗（都立府中・呼吸器内科）

症例は43歳，女性で，主訴は咳，発熱。心タンポナーデ，胸水，縦隔病変を認め，心膜剥離切開術施行し，心嚢液より M. Kansasii を検出，また，心膜生検組織では，壊死を伴った類上皮肉芽腫を認めた。術後，抗結核剤の投与を続け，速やかに改善した。心膜炎に至った成因としては，隣接する縦隔リンパ節の心嚢への直接穿破が，最も有力と考えられた。

33. 当院 IIP（特発性間質性肺炎）の予後検討

斉藤陽久，大西基喜，諸橋芳夫
（旭中央・内科）

当科過去10年間の IIP 33例を retrospective に予後を中心に検討した。初診時平均年齢は63歳で男女比は約2：1。全例の予後は，50%生存期間5.5年，3生率68%，5生率57%だった。予後と諸因子に特異的指標は認められず，重症度と関連があった。肺癌，気胸の合併率はそれぞれ15%，18%だった。

34. 肺リンパ管筋腫症の1例

山田嘉仁，篠崎俊秀，武者広隆
（国立千葉・内科）
高沢　博　（同・病理）

症例は45歳の女性，主訴は咳嗽・血痰。胸部X線上両側下肺野に網状陰影，CT 上びまん性の小さなブラの多発を認めた。開胸生検にて気腫形成を伴う平滑筋の増生およびリンパ管の軽度拡大を認めた。また顔面皮脂腺腫・脳内石灰化像・腎血管筋脂肪腫を認め，結節性硬化症に合併した肺リンパ管筋腫症と診断した。

35. 高齢者肺炎の臨床的検討

江渡秀紀，水谷文雄
（国保成東・内科）

昭和62年4月～平成2年11月末に当院に肺炎で入院した147例について検討した。肺炎にて入院した患者は70歳代が最も多く，全体の死亡率は11%で，全例が60歳以上の患者であった。年齢が70歳以上の高齢者の肺炎患者は68人おり，若年者に比べ脳血管障害，心不全，癌を基礎疾患に持つものが多く，臨床症状の特徴として，食欲低下を示すものが多く，意識障害や発熱が見られない症例も認められた。脳血管障害による“寝たきり状態”での肺炎症例では難治化する事や死亡することが多く，栄養状態も影響する可能性が考えられた。